

地上150mの大展望台で眺望を楽しんだあと、590段の階段を下りる。しばらくすると現実感が希薄になり、異界に迷い込んだような心地となつた。

階段の上下左右すべてが朱色に塗られているためだ。まるで京都の伏見稻荷大社の千本鳥居じやないか。そう思った瞬間、「境界」という言葉が浮かんだ。現実に大展望台には天照大神を祀るタワー大神宮が建立されているのだ。東京タワーが人を引きつける理由のひとつはその色にあるのではないか。日本人になじみの深い鳥居の朱色。これが青や黄色だったら、ここまで愛されていただろうか。

タワー建設の中心人物であった日本電波塔社長の前田久吉は著書『東京タワー物語』に「ましまつさきに提案されたのが、黄色と黒のシマ模様だ」と記している。ところが「道路工事なら、ただ事故を防げばそれでよいだろう。だがこれは世界一の東京タワーなのだ。美という問題を、無視してはならない」という反対意見が勝り、朱色と白のコンビに決まった。

60m以上の鉄塔に朱色と白の塗色をほどこすことが義務づけられたのは昭和35年。おそらく関係者は法制化の動向も参考にしながら決断したのであろう。タイガースファンには、ご愁傷さまという以外ない。

◆◆◆

朱色について調べてみると興味深い事実に行き当たった。列島に暮らす縄文人はベンガラ（酸化鉄）や辰砂（硫化水銀）を碎いて

数字が作つた美しさ

聖地巡礼

中

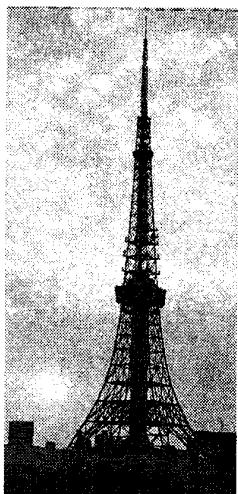
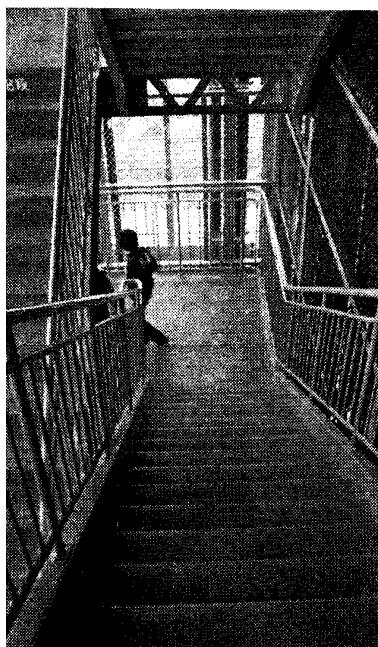
設計に当たったのは早稲田大学名譽教授で「塔博士」の異名を取った内藤多仲である。内藤は『建築と人生』にこう書いている。

「東京タワーと性格の似ているエiffel塔には、当時のフランスの建築上のスタイルから美観の要素が多分に盛られて、さまざま

朱色の顔料とし、土器や木製品に彩色したり、埋葬のさい死者に大量に振りかけたりしているのだ。

血や太陽の色、すなわち生命の色である朱色を、縄文人が神聖な

色として意識していたのは間違いない。加えてベンガラと辰砂には防腐効果があることから、それは宮殿や神社仏閣の塗装に使われるようになつたらしい。そして、平安神宮をはじめとする朱塗りの建造物を思い浮かべながら、ある事実に気付き、大発見をした気分になつた。つまり、東京タワーは日本最大の朱塗りの建造物である、ということだ。



①千本鳥居を思わせる東京タワーの階段

②朱色の空に端正な紳士然としたシルエットが浮かぶ（『東京タワーの20年』より転載）

色とくれば次は形だ。タワーの

「タワーの美しさについて、別に作為はしませんでした。ムダのない、安定したものを探求している結果できたものです。いわば、数字のつくった美しさとでもいえましょう」

人工物は不思議なことに機能性に徹すれば徹するほどシンプルな美しさを獲得する。自然の摂理に忠実だからだろう。そして、その代表といえるのが東京タワーではなかろうか。人工物でありながら、人間の思惑を超えたように、天に向かつてそり立つその姿は、きょうもわれわれを魅了す

（桑原聰）